

第8回「防潮堤を勉強する会」議事録

日時：2012年9月11日（火） 18時00分から20時30分

場所：気仙沼小学校 体育館

主催：「防潮堤を勉強する会」（事務局：スローフード気仙沼）

テーマ：「守るべきもの」に関する意見交換—ワークショップ形式

コーディネータ：菅原昭彦

司会：高橋正樹

1. 開会のあいさつ（司会）

本日はいつもと形が違い、ワークショップ形式で進めていく。資料はなし。次第と振り返りシートのみ。

本日は世古一穂先生指導のもとワークショップを行う予定であったが、本人体調不良のため世古先生の指導はまた日を改めて行う。本日は予定を変更して、菅原昭彦さんコーディネータのもと会を進めていく。

2. 注意事項、前回までの振り返り（発起人：菅原昭彦）

世古先生より本日の進め方についてのメモを預かってきたので、それに基づいてワークショップを行っていきたいと思う。いつもの質疑応答ではなく、気楽な感じで意見を交換できる場としていきたい。

前回は市議会議員の4人の方に来ていただき、議会の、大震災の復興に対する取り組み、防潮堤に関する取り組みについて話していただいた。

現在色々な方面で防潮堤の話題が出ている。テレビでも防潮堤の特集が組まれており、全国紙等でも取り上げられていた。

我々は勉強をしながら、しっかりと納得のできる結論を出していきたいと思う。

そんな中で大きなテーマとして出てきたのが、「守るべきもの」とは何か。市も県も国も明確な答えは持っていない。色々な法律の条文に関しても、高さを決める際の考え方として、その地域の色々な状況を配慮して考えるべきだと書いてある。守るべきものを考えながら、防潮堤のあり方を議論していただきたい。ただ、議論と言っても難しい会議を行うわけではないので、リラックスをして行っていただきたい。

本日の進め方は、グループに分かれてもらい、各グループにファシリテーターという進行役がいるので、その方の進行によって意見を出して話し合いを進めていただきたい。最初のテーマは「守るべきものは何か」、後半は「その守るべきものを守るためにはどうしたら良いか」、これに沿って意見を出してもらいたい。

本日、体育館の各場所に模型がある。これは神戸大学の槻橋先生指導のもと作られたもので、途中アイズブレイクのような形で槻橋先生よりお話をいただきたい。特に体育館真ん中に置かれている模型は、1万分の1のスケールの各堤防高を色分けしながら立体的に作った気仙沼市の模型。最初のテーマと次のテーマの間の時間にみなさんに見ていただきたい。

始める前にどういう地区から集まった方がいるのか少し確認したいので挙手をお願いしたい。

唐桑、大島、鹿折、鹿折と松岩の間のエリア、松岩、面瀬、階上、大谷、津谷、小泉、気仙沼市以外。

ボランティアや支援団体の方たちも多く入っているのでご理解ください。

本日のワークショップにはルールが2つある。

1つ、人の話は遮らない。そのためにも一人が長く話し過ぎない配慮をお願いしたい。

2つ、人の意見は批判しない。

ファシリテーターの進行によって進めていただきたい。

まずは意見を出していただき、その後意見交換をしていただき、話し合いをまとめていただく、そして全体で発表していただく。

自然、景観といった漠然としたものより、どこの、何を、というような具体的な内容で守るべきものの意見を出していただきたい。

宜しく願いいたします。

3. ワークショップ テーマ①：「守るべきもの」は何か？6グループ

※それぞれの班で出た意見をまとめるものとする。

【1班】

◆自然

- ・舞根の湿地
- ・自然景観を観光へ
- ・お伊勢浜・岩井崎(の海岸線)の自然回帰

◆海と共にある人々の暮らし・コミュニティ

- ・海と生きる伝統を尊重したコミュニティ
- ・おだやかな生活が出来る鮪立の環境
- ・唐桑町の子供の未来(遊べるような海)
- ・人口減少に歯止め

◆文化・芸能

- ・大浦の神社祭り

- ・小々汐の太鼓芸能

- ・唄い込みが響く浜

- ◆漁港・経済・インフラ

- ・鮪立湾・気仙沼湾・気仙沼内湾の漁港機能

- ・漁港として発展してきた商店街機能

- ◆いざという時のインフラ

- ・避難路の整備

- ・四ヶ浜の海岸沿いの道路

- ◆覚悟

<まとめ>

暮らしのベースになる海・自然・生態系を守りたい。

海と生きる覚悟を持って生きる+いざという時のインフラ

【2班】

- ◆命

- ・あしのめほしや幼稚園

- ・子供たちが安心して遊べる砂浜

- ◆建物

- ・階段式住宅群（魚町～陣山）

- ◆自然

- ・大島の小田の浜の砂浜

- ・漁船の係留（カツオ船）

- ・安波山からの夜景

- ・鼎ヶ浦の3崎

- ・神明湾の復旧

- ・神明崎のライトアップ

- ・内湾の船付場

- ・大島の海岸すべて

- ◆仕事

- ・四ヶ浜の養殖を守りたい

- ・魚町のなりわい

- ・鹿折水産加工団地

- ・内湾、岸壁の復旧が第一

- ・船の停船場所確保

- ・恒久的な生活環境が営める、漁港集落

- ・牡蠣、ホタテ等、海の恵み、綺麗な海

【3班】

守るべきものとは？

◆コミュニティ

- ・これまでつくられてきたコミュニティのつながり
- ・大谷地区のコミュニティ

◆意識

- ・津波に対する危険意識
- ・過去のまちの痕跡
- ・自然に対する畏敬

◆人命

- ・市民の命
- ・社員の命
- ・地域の子供の意識

◆景観…①

- ・内湾・浮見堂の景色
- ・気仙沼・大島の風景
- ・潮吹などの景観
- ・国立公園に入った景色

◆自然…②

- ・ワカメ・ホヤ・カイ
- ・大谷の磯場の生物

◆資源…③

- ・漁船
- ・名産・名物を生み出す海

※暮らしと関係するもの

- ・水産加工
- ・内湾地域の遊歩空間

◆①②③共通

- ・大島と唐桑の鳴り砂
- ・海洋館から大谷海岸への眺め
- ・大谷海岸の砂浜

【4班】

◆いのち

- ・家族の生命

- ・気仙沼の人々の人命
- ・全ての人命
- ・命と暮らし
- ・近所の人たちの生命

◆風景・景観

- ・内湾の“内湾らしい”風景
- ・内湾の景観(船が並び、かもめが飛び、湖のような内湾)
- ・気仙沼の港町の風景
- ・波路上漁港から見える大島の風景
- ・内湾地区の景観・浮見堂
- ・魚町・南町の海岸岸壁のたたずまい
- ・船が停留し、それを相手にする商店が並んでいる環境
- ・みなとまつりの会場行事が見ることができる場所
- ・海の道
- ・ドライブしている時に見える海岸線・大海原

◆暮らし・海と生きる

- ・気仙沼魚市場
- ・海産加工工業地帯
- ・小々湾の昆布いかだ・ワカメいかだ
- ・内湾に浮かんでいる養殖いかだ
- ・気仙沼の漁業を支える漁師
- ・ワカメ・昆布・カキなどの養殖場・養殖業
- ・漁師の生活の糧としての漁船
- ・自然に対する敬意・畏怖心

◆文化・生き方・人情

- ・浜清め(せがき供養)
- ・「ウェルカム」な雰囲気
- ・地域文化としての祭
- ・浜々に伝わる伝統文化(ex,大漁唄い込み、七福神舞 etc...)
- ・天旗まつり
- ・近い海

◆地域のつながり

- ・気仙沼市内の地域コミュニティ(人の温かさ)
- ・財産・人々の暮らし・住まい
- ・気仙沼出身の友人が帰って来る場所
- ・公民館などの集いの場

- ・学校以外のコミュニティ(大人、子どもを含む)
- ・夏は海で遊ぶ
- ◆語りつぐ
 - ・次世代に伝えなければならない津波の経験
 - ・風化の防止
 - ・地震も津波も、地球の息遣いの一つ
 - ・50年前(チリ津波時)は1～2mの防潮堤のみであったこと
 - ・今回は、L!津波を守るものを作るということ

【5班】

- ◆命
 - ・人命
 - ・暖かい人が楽しく生活できるまち
- ◆海辺で暮らせる街並み
 - ・内湾地区魚市場からのコの字岸壁までの景観と居住と産業が一体化できる暮らし
 - ・港町としての景観、漁港
 - ・街、工場
 - ・人々が安心して暮らせるまち
 - ・気仙沼内湾の景観（海と町のバランス）
- ◆自然
 - ・海が見えること（人と海とのコミュニケーション）
 - ・鹿折四ヶ浜の集落からみる静かな海、船の音
 - ・唐桑の綺麗な海（牡蠣養殖していたところ）
 - ・汽水域の保護
 - ・アマモの生息していた地域
 - ・小泉の湿地
 - ・お伊勢浜の砂浜
 - ・岩井崎
 - ・大谷海岸
 - ・大島の存在、姿
 - ・唐桑、鮪立などの海の風景
 - ・岩井崎の海岸が堤防でみえない観光地
 - ・伊勢浜の砂浜の再生
 - ・養殖施設への壁となる
 - ・海と共存するには海との壁があってはならない

【6班】

◆人命

- ・市民、家族、仲間の命

◆漁撈文化

- ・気仙沼の漁港
- ・養殖技術

◆住民自治

- ・住民の皆さんが決めるということ
- ・自分のまちを自分達で作る心

◆暮らし

- ・小泉で昔から続いてきている海、川、山とのかかわりのある暮らしを守りたい
- ・気仙沼市の家屋
- ・散歩しやすい道
- ・安心して子供が遊べる場所
- ・まちとして成立させるための人口（流出を防ぐ）
- ・交流人口

◆景観

- ・川？潮？と聞かれる美しく目の前に広がる内湾の情景
- ・観光資源になりうる赤崎海岸湾
- ・小泉の海水浴場
- ・鶴ヶ浦の高台からの眺め
- ・海から見える景観
- ・景観を守りたい

◆自然との共生

- ・唐桑、鹿折などぱつと行ってぱつと釣りができる環境
- ・気楽に遊びに行ける海辺
- ・気軽に行ける海水浴場
- ・田畑
- ・ふるさとの生態系、生物多様性
- ・国立公園、国宝公園など観光の資源として欠かせない
- ・磯辺を守りたい

※模型に関して、神戸大学、槻橋先生の話

神戸大学の槻橋です。

自分たちは1年ほど前から気仙沼に学生と一緒に来て、何かできることはないかと思い、

直接ではないかもしれないが、津波でなくなった町を500分の1という1軒1軒の家が見えるスケールの模型で復元しようという活動を行っている。昨年の夏から秋にかけてはワンテンのホールところで展示させていただき、いくつかの地域においてはそれぞれの仮設の集会所に行って模型をもとに町の思い出や守るべきもの、土地の大切なものを聞いてワークショップを行ってきた。今日配ったA4の紙に来週行われる、神戸大学、全国の建築の学生と一緒に作ってきた気仙沼の復元模型、内湾地区の魚町南町の古い伝統的な街並みの復元模型を作り地元の方から話を聞くワークショップについて書かれている。

9月22日から28日にワンテン2階のロビーで展示している。そこで話を伺いたい。

本日は休憩を含め周りに置いてある模型も見てください。

鹿折、大谷、南町、唐桑大沢、小泉、南気仙沼弁天町、階上岩井崎、大島浦の浜、田中浜 全て500分の1のスケールなので、正方形の模型であるが、1辺が1mで実際の500mの大きさである。大体1つの四角が歩いて散歩で行けるようなエリアになっている。

今日はまだ復元したのみの模型であって、話し合いの中にある防潮堤がどれくらい高くなるのか、県から指定されて地図は見ることはできるが、実際それが自分たちの景色をどれくらい変えていくのかということについて、今の時点では反映できていない。ただ、模型なので指定している高さの防潮堤の模型を加えていくことで、実際にどういう風が変わっていくのかということも見ていただくこともできる。これからも機会があれば協力していきたい。

真ん中の模型は畳み3畳分で縮尺が1万分の1。気仙沼湾全部が入っている。沿岸部は地形も再現している。県や水産庁が提示している防潮堤のシミュレーションの高さを色別にして地区ごとに含めている。今回は完璧ではないので、次回までには完璧にしたい。

真ん中の模型では、全体像はわかるが自分たちの家の周りの空間などが掴みにくい部分もあるので、周りの大きい模型も含めて見ていただくとわかりやすくなる。

今日は松岩、浪板、四ヶ浜など再現できていない地区もある。今後できるだけ進めたい。防潮堤を含む新しいまちづくり、思い出、大切なもの、津波の記憶を継承していく活動に繋がってほしい。

3. ワークショップ テーマ②:「守るべきもの」を守るために。6グループ

財産を守るためにどうした良いか、というテーマに沿って以下の4点以外の案を出して意見交換をしてもらいたい。

- ①そのまましておく。防災体制は整備する。
- ②震災前の状況に復帰する。原型復旧。
- ③L1の津波に対応できる防潮堤を作る。現在の県の案を受け入れる。
- ④L2の津波に対応できるウルトラスーパー堤防を作る。

他の意見を出していただき、そのメリットデメリットについて話し合ってください。

※実質的な話し合いの時間は20分ほどで、メリットデメリットについてまで話し合うことができたグループは多くなかった。

【1班】

◆大谷地区

- ・海岸に防波堤は用いず、国道45号線をかさ上げする

◆階上地区

- ・自然の形状を活かして市並みを弱める
- ・防波堤よりも避難道を整備してほしい

◆大浦・赤岩間の三陸道架

- ・橋を北に200mほど移動させて、さらに可動式防潮堤にしてほしい

◆新しいアイデア

- ・“避難”を前提に考える（避難道、避難ビル）
- ・“避難”に繋がる防災教育を行う
- ・地域で“訓練”を経験する

【2班】

◆建物

- ・浸水区域の建物、施設を高床式にする
- ・高層ビル、住宅
- ・(内湾地区)津波に耐える建物群(1F-2F)で街区を構成する
(震災前+ α の防潮堤を造ったことを条件)

◇メリット

- ・近くで逃げられる

◇デメリット

- ・個人の資産によって実現しない可能性
- ・高齢者にとって不自由
- ・裏山があると高いビルは不要

◆土地利用

- ・一定の地域ごとの集団移転
- ・海拔20mにすべて集団移転
- ・高台移転もしくは安心安全な高層ビル住宅
- ・住居区分を決める建物が残っていても居住できないようにする

◆道路

- ・波の勢いを減らせるように道を作る
- ・避難道の拡幅を増やす

◆可動式防潮堤

・気仙沼内湾を広く守るために近代の工学によりフラップゲート式稼働防潮堤を設置、時間がかかっても実現を待つ

◆コミュニティ

- ・コミュニティの充実、声掛け、助ける、情報をすばやくキャッチする
- ・過去の震災から学ぶ
- ・防災訓練、経験を語り継ぐ

◆防災設備

- ・地震、津波発生の連絡、装置を全戸取りつけ
- ・複式高層駐車場を配置する

【3 班】

◆暮らし

- ・理想の町をみんなで描く

◆資源・自然

- ・自然には手を加えずその変化を見守るべき→自然は元に戻ろうとしている
- ・以前の自然に戻ったので、これを守る必要がある→長期スパンで自然の回復力を見極めながら護岸を計画すべき
- ・海辺に林を作ることによって防災機能を果たす
- ・津波でできた自然を活かす（例）小泉海水浴場→防潮堤の高さはそのまま、作る位置を後方にする
- ・原状復旧が許される範囲で防潮堤を作るなら沿岸より 100～200m後方に作るべき
- ・防潮堤を作るなら国道で代替する

◆教育

- ・市民、市議、市職員の意識を変える必要がある
- ・防災教育
- ・避難経路の整備

【4 班】

◆人口地盤によるかさ上げ

- ・人口地盤による避難道を作る
- ・①レベル 1 津波から明治大津波を除くことで高さの基準を変え、景観を損なわない程度の防潮堤の設置②震災前より高いかさ上げ、を同時に行う
- ・防災避難ビル建設
- ・強固な（住宅・店舗）建物の建造→海辺 or 安い造り

◆高台移動・セットバック

- ・沿岸には住まない→海からの恩恵が減る
- ・居住制限をかける（居住部分を上階にすることを含む）
- ・防潮堤・避難道必要なし→生活の場（住宅・街並みなど）は全て高台に義務付け
- ・レベル2 津波が届かない所までセットバックする（できないもの＝船、養殖施設など）
- ・財産に優先順位を付ける
- ◆社会教育・仕組み
 - ・地震が来たら津波が来ることを学校や地域内で教える
 - ・助け合いのコミュニティ
- ◆その他
 - ・防潮林の植樹
 - ・湾口防潮堤を大島～岩井崎間に作る
 - ・津波保険→全国の沿岸域自治体で作る共済のようなもの

【5班】

- ◆資源（自然・景観含む）
 - ・自然という財産を守る意識を持つ
 - ・自然環境を活用した産業づくり
 - ・自然環境を活用した遊歩道の整備→意識を環境へ向ける
 - ・各浜の漁業形態・地形等によって防潮堤を変えていくべき→無いことも視野に
 - ・（鮎立）ひな壇タイプの防潮堤にしてほしい
 - ・（鮎立）防潮堤の高さは今後の話合いで詰める
 - ・（鮎立）浸水危険区域の買い上げ
- ◆人命
 - ・交通インフラ（～道、JR、避難道など）を使った多重防御網の整備
- ◆暮らし
 - ・レベル1の堤防より低い道路（生活道）の整備→可能なら防潮林で

【6班】

- ◆資源（自然、景観を含む）
 - ・海岸沿いに大きな建造物を作らない。海岸は自然復帰。
 - ・防潮堤は原状復帰、港機能を残す。
 - ・新しいライフスタイルの確立
- ◆人命
 - ・沿岸部に丈夫な木を植樹←波を弱める効果。
 - ・危機意識を持ち続けること
 - ・未来へ継承するため教育現場で「まず高台へ逃げることを」教え続ける。

- ・防潮堤はレベル1の1/3で十分←南町魚町は山が近い。
- ・高台が近い内湾地区や南町は、まず逃げる
- ・防災意識が大切であることを教える＝防災教育。
- ・子どもたちの避難訓練・町全体の避難訓練を繰り返し行う。
- ・津波記録を使つての避難訓練
- ・高台のない地域には数本の避難経路と5F以上の建物
- ・避難経路の拡充
- ・自然との関わり方に関する教育
- ・町に神社を作り、浪分・波に関する教育

◆暮らし

- ・空中店舗、空中コミュニティ
- ・浮く建物
- ・津波浸水地域の居住制限

4. 課題の整理：菅原昭彦

本日この形式で行ったのは、普段話すのに慣れていない方でもこういう形式であると話すことができるという場作り、方法もあるのだということをご理解いただくために行った。今後も色々な説明会、懇談会などがあり、なかなか意見も言うことができなかつたりするが、やり方によってはきちんとみなさんの意見が出せる作り方があるのだということを知っていただきたいと思い本日の形式を選んだ。それから、内容については、色々な考え方がある、地域によって違う状況がある、年代や業種によって違う、ということもワークショップを通して感じてもらえたのではないかな。人の意見は多様である。これから合意形成を図っていくうえでは、多様なものをきちんと自分なりに受け止めていかなければいけないと思う。

何がどうなっていけば合意形成であるかとは言えないが、少しでも多様な考え方を聞くということが大切であると思う。色々な方法論についても、こちらが提示した4つのものも、これだけで全部が守れるというものではなく、自分たちの中でも色々な選択肢を持つべきである、単純に与えられたものに何か言うのだけではなく、自分たちの中でも色々な対案を持っておくことが重要である。防潮堤のように1つのプランを提示される場合が多いので、行政としても色々な選択肢を示していくことが必要で、その中から住民がきちんとした選択をできるようになっていく、あるいはそれに対してきちんとした対案を持っておくことが大切だと感じ、2つ目のテーマを設けさせていただいた。

次回以降の防潮堤勉強会は、また勉強の形に戻り、9回目は9月14日、防潮堤が与える砂浜への影響、奥尻に学ぶ巨大堤防建設経過と建設後の功罪について。10回目は9月18日、防潮堤とまちづくりの今後の進め方について講演をいただく。

今月下旬くらいに、市長との意見交換として意見を言い合える場を作っていきたい。
時間がない中でどんどん進めていくが、また参加していただきたいと思う。
今日のワークショップについてはここで終了する。

ここで質問が一つ。

Q.防潮堤を海岸に作る必要はないのでは？

A.司会より。今までの勉強会で話をしてくれた先生もいた。次回の勉強会でも話してくれる先生がいるので宜しくお願いいたします。

※神戸大学、槻橋先生より一言

以前より、唐桑大沢地区で高台移転をする住民の方々と本日と同じような形式でワークショップを手伝っている。みなさん小さく分かれて、色々なことをまず言い合って、その中で話をまとめていって、色々な意見があるのだなという中から、将来像を決めていくというのが良い方法なのではないかと思う。

模型にすると、ここで11mあっても良いが、ここだと海が見えなくなる、など場所によって住んでいた方が知っている場所の良さ、魅力がある。

自分たちも専門家という立場で来ているが、一番の専門家は住んでいるみなさん。なるべく自分たちも地元の方のようになれるか、地元の住民の方もどれだけ専門家のようにになれるか、それがまちづくりをうまくやっていく秘訣であるかと思う。専門家になるということは、決して難しいことではなく、自分が住んでいた地域に関しては誰よりも知っているという強みがあるので、その観点から素朴に感じることを説明者にぶつけていただきたい。専門家も悪意があって行っているわけではないので、議論を発生させるようにどんどん色々な意見を言っていくのが一番の道なのではないかと思う。

ぜひ本日のような形を継続していただき、より良い気仙沼を未来に残していけるようにしてほしい。我々もできる限りお手伝いさせていただくので、頑張りましょう。

5. 閉会の挨拶 (司会)

先ほども案内あったように、22日から槻橋先生の模型のワークショップがある。

今日感じていただいたように、こういうワークショップはファシリテーターが上手だったらまとまるというものでもない。参加者一人一人が全体を考えながら短くまとめて話す、人の話を聞く、そういうことがあって初めて意見がまとまるということだと思う。何回もこのような機会を捉えて参加することが良いことだと思う。ぜひ槻橋先生のワークショップにも参加してください。

次回、第9回目は9月14日、場所は東新城「すこやか」18時—20時。

次回も多数の参加を待っております。ありがとうございました。

以上